

若者言葉「フツーに」と「フツー(だ)」 が表す程度の相違について

洞澤 伸・村瀬 仁美

(2014年6月27日受理)

On the Different Degree Expressions of “Futsu-ni” and “Futsu(da)” in Young People's Slang

Shin HORASAWA and Hitomi MURASE

1. 問題提起

本稿の目的は、事態の程度を表す程度表現のうち、若者たちが使用する「フツーに」と「フツー(だ)」が表す程度の相違、および、両者の使用場面と表現機能について明らかにすることである。「フツーに」は「普通」の副詞的用法であり、「フツー(だ)」はその述語的用法である。ただし、ここでは、副詞的用法「フツーに」は事態の程度を表す程度副詞の用法に限定する^{*)}。すなわち、その被修飾語は形容詞または形容動詞の場合とする。

副詞的用法(程度副詞)「フツーに」と述語的用法「フツー(だ)」の使用例として、それぞれ、たとえば、次の(1)(2)がある。

- (1) (友達と一緒に街を歩いているときに小さな子供を見かけた友達が私に)
「ねー見て、あの子フツーに可愛いよね。」 [副詞的用法]
- (2) (「ねー見て、あの子可愛いくない?」と友達から聞かれたのに答えて)
「フツーだと思うよ。」 [述語的用法]

次の(3)は、国語辞典における「普通」の語彙的意味である。この(3)にもとづけば、両者は、その用法の別なく、事態が表す程度の中位を意味するはずである。

- (3) 【普通】[名・形動]「他の同種のものとくらべて特に変わった点がないこと。
特別でなく、ありふれていること。「ごく—の考え」「—とは違った印象」
(『明鏡国語辞典(第二版)』)

ところが、後述するが、程度の中位を標準値“ゼロ”(0)とすると、副詞的用法「フツーに」は一般に中位からプラス方向の高い程度を表す。他方、それとは対照的に、述語的用法「フツー

「だ）」は一般に中位からマイナス方向の低い程度を表す。つまり、これら(1)(2)における「フツー」は、「子供の可愛さ」について、ともにその程度の中位を含むものの、用法別に別方向の程度も表すのである。本研究では、両者が表すこのような程度の相違、および、その使用場面と表現機能を明らかにしたい。

そこで、本稿では若者言葉「フツーに」と「フツー(だ)」について、次の(イ)(ロ)の2つの問題を考察する。

(イ)「フツーに」と「フツー(だ)」が表す事態の程度レベル

(ロ)「フツーに」と「フツー(だ)」の使用場面と表現機能

問題(イ)では、「フツーに」と「フツー(だ)」が表す程度の相違を検討する。その際、程度の相対的な強度を示す5段階のスケールを使用して、両者が表す事態の程度レベルを測定する。問題(ロ)では、これらの表現が使用されるのは実際にどのような場面であり、また、それにはどのような表現機能があるのかを考察する。なお、使用場面と表現機能については、多様なものがあると考えられ、網羅的に把握することはできない。そのため、ここではいくつかの特徴的なものを取り上げるだけにとどめたいと思う。以上、本稿ではこれら(イ)(ロ)の2つの問題について考察する。これまでに、このような観点から実際の使用例を分析の対象とした具体的な研究はあまり行われていない。

本研究の着想の契機は、NHK総合テレビの番組【みんなでニホンGO!】「「フツーにかわいいね」って褒め言葉？」(2010年4月15日放送)にある。バブル経済崩壊後、日本社会の格差拡大と沈滞化によって「普通」の価値が相対的に上昇した。その結果、若者たちの間では「普通であること」が願望または理想となり、その評価が高くなった。そのために、「フツーに」はプラス評価の言葉に変化したという。番組では、このように「フツーに」のプラス方向への意味変化は「普通であること」に対する社会的価値観の変化によるものであると解説されていた。また、番組では「フツーにかわいい」または「フツーにかっこいい」と言われて、「うれしい」と思うか、それとも「うれしくない」と思うかがスタジオに参加する100名の老若男女に対して問われた。その結果は、「うれしい」と思うが60%、「うれしくない」と思うが40%という結果であった。若者世代の多くは「うれしい」、年長者たちは「うれしくない」という答えであった。その他のいくつかの事実から、「フツーに」による程度表現は、標準値(すなわち「普通」)よりも高評価と受けとめられていることが指摘された^{*)}。そこで、本稿筆者は副詞的用法「フツーに」だけではなく、それを述語的用法「フツー(だ)」と対照させることにより、両者が表す事態の程度の相違を明らかにしたいと考えた。もし、【みんなでニホンGO!】において指摘されたとおり、若者たちの間において「普通」の語彙的意味が日本社会の状況変化によって上昇したのであれば、副詞的用法「フツーに」だけではなく、述語的用法「フツー(だ)」もプラス評価の言葉に変化しているはずである。

井本(2011)では、このことにいち早く着目して、「フツーに」の修飾程度についての考察が行われている。それによれば、「フツーに」の高い程度を表す用法は、「普通」の語彙的意味の変化や「普通であること」に対する社会的価値観の変化によるものではないことが指摘されている。つまり、そこでは上記のテレビ番組【みんなでニホンGO!】の内容とは別の見解が示されている^{*)}。そして、「フツーに」が高い程度を表すと解釈されるのは、標準値よりも低い程度が前提として導入される文脈的条件、および、副詞的修飾関係という構文的性質によって複合的にもた

らされる現象であることが論証されている。また、そこでは「フツーに」と「フツー(だ)」の程度値についても、分析が行われており、「フツー(だ)」が表す程度は「フツーに」ほど高くないことが明らかにされている。本研究では、両者が表す事態の程度の相違を新たに考察してみたい。

2. アンケート調査

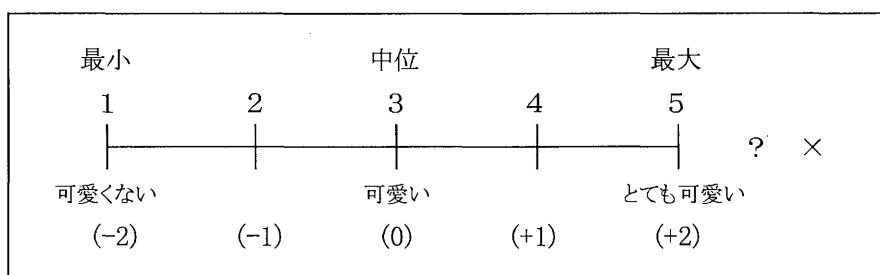
本稿では、岐阜大学の学生に対して2012年および2013年に行われた「フツー」という表現についてのアンケート調査を分析の対象にする。アンケートの調査対象となった学生たちの平均年齢は20.0歳であり、性別の内訳は男性88人、女性82人、性別不明1人の合計171人であった。アンケートでは、副詞的用法「フツーに」と述語的用法「フツー(だ)」の使用について尋ねた。その質問事項の概要は、次の(4)①～⑤の通りである。

(4) アンケートの質問事項(概要)

- ①「フツーに」と「フツー(だ)」の使用の有無
- ②「フツーに」と「フツー(だ)」の使用に対する考え方
- ③「フツーに」と「フツー(だ)」が表す事態の程度レベル
- ④「フツーに」と「フツー(だ)」の実際の使用例と事態の程度レベル
- ⑤「フツーに」と「フツー(だ)」の表現機能

このアンケートでは、副詞的用法「フツーに」と述語的用法「フツー(だ)」が表す事態の程度レベルを測定するために、次の(5)に示すような程度表現のスケールを用いた。

(5) 程度表現のスケール



この程度表現のスケール(5)は、「可愛い」という言葉を例にして、その程度の強度を相対的に5段階のレベルで表示したものである。「可愛さ」の程度として、「1」を最小(可愛くない)、「5」を最大(とても可愛い)とする。「3」は程度の中位を表す標準値“ゼロ”(0)、そして「2」と「4」は、それぞれ「1」と「3」、「3」と「5」の間を表すものとする。なお、程度の中位を表す「3」の標準値“ゼロ”(0)とは、事態の程度レベルが“ゼロ”という意味ではない。それは、あくまで程度表現のスケール(5)上で中位の位置を表すものとする。そのことによって、中位「3」(0)を原点として、事態が表す程度を「1」(-2)、「2」(-1)、「3」(0)、「4」(+1)、「5」(+2)のように、プラス[+]とマイナス[-]を使用してスケール上に段階的に位置づけることができる。そして、スケールの「1」と「2」を<マイナス[-]のレベル>、「4」と「5」を<プラス[+]のレベル>と呼ぶことにする。また、アンケートでは「可愛さ」の程度が判断できない、または、程度を表していないと考えられる場合に対して、そ

れぞれ、「?」、「×」という選択肢も設けた。アンケートでは、回答者に「フツに」と「フツ（だ）」の実際の使用例をあげてもらい、その使用場面、文の意味、また事態が表す程度レベルの記載を求めるとともに、その表現機能についても考えてもらった。ただし、事態が表す程度、たとえば、「子供の可愛さ」の程度について、各程度レベルの実態を客観的に規定することは困難である。事態の程度判断は個人によって異なり、その認識上の違いは程度レベルの判断の相違となって表れる。しかし、そこには一般的な傾向は認めることができると思われる^{*4)}。

以下ではアンケートの回答者が程度表現のスケール(5)のレベル「1」～「5」を選んだ場合は、それぞれ“程度1”～“程度5”、また、「?」、「×」を選んだ場合は、“程度?”、“程度×”と表記する。

3. 分析

3.1. 事態の程度レベルについて

ここでは、副詞的用法「フツに」と述語的用法「フツ（だ）」が表す程度の相違について考察する。

3.1.1. 「フツに」が表す事態の程度レベル

副詞的用法「フツに」の使用の有無、この表現に対する考え、および、それが表す事態の程度レベルを調べるために次の例文(6)を用いた。

- (6) (友達と一緒に街を歩いているときに小さな子供を見かけた友達が私に)
「ねー見て、あの子フツに可愛いよね。」

まず初めに、副詞的用法「フツに」という表現の使用の有無を調べるために、(4)①「あなたは、このような「フツに」という言い方をしますか?」という質問をした。その結果、「はい」と答えた人は141人(82.5%)、「いいえ」と答えた人は27人(15.7%)で、無記入の回答者は3人(1.8%)であった。アンケートの調査対象となった若者たちの約8割が副詞的用法「フツに」を使用することが分かった。

次に、使用の有無と合せて、副詞的用法「フツに」という表現が気になるかどうかについて、(4)②「あなたはこのような言い方についてどう考えますか?」という質問をした。その際、次の(7)の選択肢1)～6)の中から一つを選択してもらった^{*5)}。その結果は、無記入の回答者5人を除くと、次の(7)の通りである。

- | | |
|---------------------------|--------------|
| (7) 「フツに」の使用の有無と気になるかどうか | (n=166) |
| 1) 自分も使うし、他人が言うのも気にならない | 130人 (78.3%) |
| 2) 自分は使わないが、他人が言うのは気にならない | 23人 (13.9%) |
| 3) 自分は使うが、他人が言うのは気になる | 5人 (3.0%) |
| 4) 自分は使わないし、他人が言うのも気になる | 4人 (2.4%) |
| 5) どれに近いとも言えない | 4人 (2.4%) |
| 6) 分からない | 0人 (0.0%) |

この(7)に示したように、1)「自分も使うし、他人が言うのも気にならない」と答えた人は130人(78.3%)、2)「自分は使わないが、他人が言うのは気にならない」と答えた人は23人(13.9%)、3)「自分は使うが、他人が言うのは気になる」と答えた人は5人(3.0%)、4)「自分は使わないし、他人が言うのも気になる」と答えた人は4人(2.4%)、5)「どれに近いとも言えない」と答えた人は4人(2.4%)、6)「分からない」と答えた人は0人(0.0%)であった。以上のことから、副詞的用法「フツーに」は、若者たちの間に定着している表現であることが分かる。

続いて、副詞的用法「フツーに」が表す事態の程度レベルを調べるために、例文(6)に対して程度表現のスケール(5)を用いて、(4)③「あなたが考えるその子供の可愛さの程度はどれほどのものですか？」という質問をした。すなわち、これは例文(6)において、「フツーに」が表す「子供の可愛さ」の程度を測定する質問である。その際、程度表現のスケール(5)の中から該当する可愛さの程度を一つだけ選んでもらった。その結果は、次の(8)の通りである。

(8) 「フツーに」が表す事態の程度レベル (n=167) [平均値:3.56]			
1) “程度1” (-2)	0人	(0.0%)	
2) “程度2” (-1)	1人	(0.6%)	
3) “程度3” (0)	65人	(38.9%)	} 中位～プラス:161人 (96.4%)
4) “ <u>程度4</u> ” (+1)	83人	(49.7%)	
5) “程度5” (+2)	13人	(7.8%)	
6) “程度?”	3人	(1.8%)	
7) “程度×”	2人	(1.2%)	

この(8)に示したように、「フツーに」が表す事態の程度レベルについては、無効回答の4人を除くと、1)“程度1”と答えた人は0人(0.0%)、2)“程度2”と答えた人は1人(0.6%)、3)“程度3”と答えた人は65人(38.9%)、4)“程度4”と答えた人は83人(49.7%)、5)“程度5”と答えた人は13人(7.8%)であった。その程度の平均値は、3.56となる。また、6)“程度?”と答えた人は3人(1.8%)、7)“程度×”と答えた人は2人(1.2%)であった。“程度4”と答えた人は、83人(49.7%)であり、最大グループを形成している。また、これらを<マイナス[-]のレベル> (“程度1”と“程度2”)、中位 (“程度3”)、<プラス[+]のレベル> (“程度4”と“程度5”)の3段階に分けると、それぞれ、合計1人(0.6%)、65人(38.9%)、96人(57.5%)ということになる。さらに、中位 (“程度3”)および<プラス[+]のレベル> (“程度4”と“程度5”)の合計は161人(96.4%)である。以上のことから、「フツーに」は一般に中位からプラス方向のレベルを表すことが分かる。

3.1.2. 「フツー(だ)」が表す事態の程度レベル

副詞的用法「フツーに」と同様に、述語的用法「フツー(だ)」の使用の有無、この表現に対する考え、および、それが表す事態の程度レベルを調べるために次の例文(9)を用いた。

- (9) (「ねー見て、あの子可愛いくない?」と友達から聞かれたのに答えて)
「フツーだと思うよ。」

まず初めに、述語的用法「フツー(だ)」という表現の使用の有無を調べるために、(4)①「あな

たは、このような「フツー(だ)」という言い方をしますか?という質問をした。その結果、「はい」と答えた人は159人(93.0%)、「いいえ」と答えた人は12人(7.0%)で、無記入の回答者は0人(0.0%)であった。アンケートの調査対象となった若者たちの約9割が述語的用法「フツー(だ)」を使用することが分かった。

次に、使用の有無と合せて、述語的用法「フツー(だ)」という表現が気になるかどうかについて、(4)②「あなたはこのような言い方についてどう考えますか?」という質問をした。その結果は、次の(10)のようになった。

(10) 「フツー(だ)」の使用の有無と気になるかどうか (n=171)

1) 自分も使うし、他人が言うのも気にならない	158人 (92.4%)
2) 自分は使わないが、他人が言うのは気にならない	9人 (5.2%)
3) 自分は使うが、他人が言うのは気になる	0人 (0.0%)
4) 自分は使わないし、他人が言うのも気になる	1人 (0.6%)
5) どれに近いとも言えない	3人 (1.8%)
6) 分からない	0人 (0.0%)

この(10)に示したように、1)「自分も使うし、他人が言うのも気にならない」と答えた人は158人(92.4%)、2)「自分は使わないが、他人が言うのは気にならない」と答えた人は9人(5.2%)、3)「自分は使うが、他人が言うのは気になる」と答えた人は0人(0.0%)、4)「自分は使わないし、他人が言うのも気になる」と答えた人は1人(0.6%)、5)「どれに近いとも言えない」と答えた人は3人(1.8%)、6)「分からない」と答えた人は0人(0.0%)であった。以上のことから、述語的用法「フツー(だ)」は、副詞的用法「フツーに」と同様に若者たちの間に定着している表現であることが分かる。

続いて、述語的用法「フツー(だ)」が表す事態の程度レベルを調べるために、例文(9)に対して程度表現のスケール(5)を用いて、(4)③「あなたが考えるその子供の可愛さの程度はどれほどのものですか?」という質問をした。その結果は、次の(11)の通りである。

(11) 「フツー(だ)」が表す事態の程度レベル (n=170) [平均値:2.37]

1) “程度1” (-2)	1人 (0.6%)	} 中位～マイナス:162人 (95.2%)
2) “程度2” (-1)	97人 (57.0%)	
3) “程度3” (0)	64人 (37.6%)	
4) “程度4” (+1)	4人 (2.4%)	
5) “程度5” (+2)	0人 (0.0%)	
6) “程度?”	0人 (0.0%)	
7) “程度×”	4人 (2.4%)	

この(11)に示したように、「フツー(だ)」が表す事態の程度レベルについては、無効回答の1人を除くと、1)“程度1”と答えた人は1人(0.6%)、2)“程度2”と答えた人は97人(57.0%)、3)“程度3”と答えた人は64人(37.6%)、4)“程度4”と答えた人は4人(2.4%)、5)“程度5”と答えた人は0人(0.0%)であった。その程度の平均値は、2.37となる。また、6)“程度?”と答えた人は0人(0.0%)であった。

0%)、7)“程度×”と答えた人は4人(2.4%)であった。“程度2”と答えた人は、97人(57.0%)であり、最大グループを形成している。また、これらを<マイナス[-]のレベル> (“程度1”と“程度2”)、中位 (“程度3”)、<プラス[+]のレベル> (“程度4”と“程度5”)の3段階に分けると、それぞれ、合計98人(57.6%)、64人(37.6%)、4人(2.4%)ということになる。さらに、中位 (“程度3”)および<マイナス[-]のレベル> (“程度1”と“程度2”)の合計は162人(95.2%)となる。以上のことから、「フツー(だ)」は一般に中位からマイナス方向のレベルを表すことが分かる。

以上、「フツーに」と「フツー(だ)」が表す程度の相違について考察した。その結果、「フツーに」は一般に中位からプラス方向のレベルを表し、それとは対照的に、「フツー(だ)」は一般に中位からマイナス方向のレベルを表すことが明らかになった。

3.2. 使用場面と表現機能について

ここでは、副詞的用法「フツーに」と述語的用法「フツー(だ)」の使用場面と表現機能について考察する。その際、アンケートの質問事項(4)④および⑤によって、回答者にあげてもらった実際の使用例とその意味および表現機能についてのコメントを分析の対象とする。なお、繰り返しになるが、使用場面と表現機能については多様なものがあると考えられ、そのすべてを把握することはできない。そのため、以下では、いくつかの特徴的なものを取り上げるだけにとどめることにする。

3.2.1. 「フツーに」の使用場面と表現機能

3.1.1.の分析から、「フツーに」は一般に中位からプラス方向のレベルを表すことが明らかになった。また、“程度4”[83人(49.7%)]が最大グループを形成していることが分かった。実際にアンケート調査によって集まった「フツーに」の使用例の数は、“程度4”とするものが最多であり、その次に“程度3”とするものが多かった。そのため、特徴的だと思われる“程度4”の使用例を中心に「フツーに」が使用される場面について考察する。そして、その他の程度を表す使用例も含めて「フツーに」の表現機能を分析する。

副詞的用法「フツーに」の使用例として、たとえば、次の(12)～(23)がある。なお、各使用例のあとにある記号は、回答者の性別と生年を表す。

- (12) (友人とカラオケに行って)「お前、フツーに歌うの上手いじゃん！」(M,'95)
- (13) (友人からディズニーランドに行った話を聞いて友人に)「フツーに羨ましい。」(F,'92)
- (14) (ある人の服装を見たとき、友人に対してその人の服について言う時)「あの人の服、かっこいいよね」—「うん、フツーにかっこいい。」(M,'93)
- (15) (友人とラーメンを食べているときに)「ここのラーメン、フツーに美味しいね！」(F,'91)
- (16) (高校野球で選手の動きを見て友達に)「あの人フツーにうまいね。」(M,'93)
- (17) (野球の試合を見ていて友人に)「なあ、あのピッチャー、フツーに上手くね？」(M,'94)
- (18) (サッポロラーメン21番に行ってチャーハンを注文して食べていて)「これ、フツーに多いよね？」(M,'92)

- (19) (〇〇というお店にご飯を食べに行こうと友達を誘って)「〇〇へ行こうよ！」—「えっ、フツーに遠くない？」(M,'93)
- (20) (友人とゲームをしていて、敵キャラが強いことを言うとき)「このキャラ、フツーに強くない？」(M,'94)
- (21) (友人と駅前で路上ライブをしている人を見かけて)「あの人、ギターうまい？」—「フツーにうまいよね。」(M,'93)
- (22) (友人と本屋に行き、発売されたばかりの新刊を手にとって)「ねえ、この本、フツーに面白そう！」(F,'93)
- (23) (友人が「お化け屋敷に入ろうよ」と言ってくる)「怖くないから入ろうよ」—「いやいや、フツーに怖いって！」(F,'92)

これらの使用例から、副詞的用法「フツーに」は対象への評価が自分の予想または基準を上回ったことを表す場合の他、単に事態を表す程度が高いこと、また、相手の問いかけに賛同したり、相手に同意を求めるような場面で使用されていることが分かる。たとえば、(12)では、カラオケで歌が下手だと思っていた友人が思いの外、上手であったことを表現している。(13)では、ディズニーランドに行ってきた友人が単にとっても羨ましいことを言い表している。(14)では、友人からの「服の格好良さ」についての問いかけに対して、肯定的な意味で同意して応答している。(15)では、ラーメンの味が美味しいことについての同意を友人に求めている。その他の使用例(16)～(23)においても同様である。なお、このような判断は、アンケートの質問事項(4)④において、回答者から使用例と一緒に書いてもらった文の意味を元にしたものである。

次に、副詞的用法「フツーに」の表現機能について考察する。アンケートから、いくつか特徴的なものが浮かび上がってきた。先に、「フツーに」は一般に中位からプラス方向の度合を表すことを示した。つまり、「フツーに」は、通常、中位(“程度3”)から<プラス[+]のレベル>(“程度4”と“程度5”)の事態を表す。

「フツーに」が中位(“程度3”)の事態を表す場合のコメントには、たとえば、次の(24)～(27)がある。

- (24) 「〇〇というお店にご飯を食べに行こうと友達を誘って、「〇〇へ行こうよ！」に対して「えっ、フツーに遠くない？」のように答えるとき、「フツーに」には、自分が大多数の人の代弁者となったかのような効果があつて、「一般的に」と同じ意味だと思う。だから、たとえば、「フツーに遠い」という表現の場合は、いかにも大勢の人がそう思っているかのように伝えるときに使う。」(M,'93)
- (25) 「細い友人を見て他の人に「あの子、フツーに細いよね？」と言うとき、私が話していることは「普通」、まさに「一般論」であり、「正しいのだよ」という表現効果があると思う。また、聞き手に「社会(?)も認めている一般的なことなんだよ、私の話していることは！」という意味を込めて「フツーに」を使っていると思う。」(F,'92)
- (26) 「「このご飯の量フツーに多いよね」という場合、「誰が見ても多いと感じると思うけど」という意味が含まれていると思われる。つまり、「フツーに」は、

「誰が見ても」という表現の代わりであると思う。」(M,'95)

- (27) 「友達から「映画おもしろかった?」と聞かれ、「うん、フツーにおもしろかったよ。」と答えるとき、「自分はまちがってないでしょう?」ということを相手に確認するような意味合いでの表現効果があると思います。」(F,'94)

これらの使用例では、それぞれ、(24)「お店までの距離の遠さ」、(25)「友人の体格の細さ」、(26)「ご飯の量」、(27)「映画の面白さ」の程度について、それが中位であり、ごく一般的なものであることが言い表されている。このように、「フツーに」には(24)「一般的に」、(25)「普通」「一般論」「正しい」、(26)「誰が見ても」というように、自分の判断は常識的なものであり、(27)「自分はまちがってないでしょう?」ということを相手に伝える表現機能が認められる。

また、「フツーに」が“程度4”または“程度5”の事態を表すとき、強調の意味で使用される場合がある。そのことに関するコメントとして、たとえば、次の(28)～(31)がある。

- (28) 「「フツーに美味しい」「フツーに羨ましい」は、当たり前になそう思うという意味で、「とても美味しい」「とても羨ましい」などのプラスのイメージがあると思います。したがって、「フツーに」には、たとえば、「フツーに可愛い」であれば、「可愛い」を強める表現効果があると思う。」(F,'92)
- (29) 「「フツーに美味しい」「フツーに可愛い」などの場合、「フツー」は、普通とは違い、「真ん中(中間)」を表すものではないと思う。「すごく美味しい」「とても可愛い」の「すごく」「とても」などと同じような働きをしていると思う。」(M,'94)
- (30) 「この「フツーに」という言葉には、基準点よりも少し、または、大きく優れているということが言えると感じる。」(M,'92)
- (31) 「自分で使う言葉と比べると、「めっちゃ」「すげー」(「とても」の意味)よりは劣るが、自分の中では割と良い、もしくは良いと思っている時に「フツーに○○は良い」みたいな形で使う。」(M,'93)

これらの使用例、(28)「プラスのイメージがある」、「フツーに可愛い」は「可愛い」を強める効果がある、(29)「真ん中(中間)」を表すものではなく、「すごく」「とても」と同じような意味、(30)「基準点よりも少し、または、大きく優れている」、(31)「めっちゃ」「すげー」(「とても」の意味)よりは劣るが、自分の中では割と良い、もしくは良いと思っているなどから、「フツーに」には事態の程度の意味を強調する表現機能があることが分かる。

さらに、「フツーに」には、次の(32)の使用例が示すように「ぼかし言葉」としての働きもある。

- (32) (男友達と話しているとき、彼女の写真を見せられて)「オレの彼女、可愛いくない?」—「うん、フツーに可愛い。」(F,'92)

アンケートの回答者によると、この(32)における事態の程度は“程度2”である。つまり、話者は男友達の彼女をあまり「可愛い」とは思っていないが、「フツーに可愛い」と言っていることになる。この(32)の回答者によると、この発話の心理は「まあ、そう言っておいた方がいいかな。そう

言っておけば、相手は納得するから。」というものであった。このことから、(32)では男友達の彼女に対する評価について、相手の心を傷つけないようにする配慮から「フツーに」が使われていることが分かる。このように「フツーに」は、一つの「ぼかし言葉」としても使われる。このことに関係すると思われるコメントとして、たとえば、次の(33)～(36)がある。

- (33) 「友達が腕時計のことについて「この腕時計、可愛くない？」と聞いてきたときに、ものすごく可愛い訳でもない場合、「フツーに可愛い」と言うことによって、相手を傷つけないようにする効果があると考えられる。実際に自分がそのものを可愛くないと思ったとしても、「可愛くない」とは言えないし、「すごく可愛い」とは心から言えないので、そういう場合に使うと思う。」(F,'93)
- (34) 「「フツーに」には、言葉を濁らせるような効果もあると思います。はっきり「こうだ！」と言ってしまうよりは、表現が軟らかくなっていいのではと思います、個人的にはよく使っています。たとえば、「映画おもしろかった？」—「うん、フツーにおもしろかったよ。」の場合、たとえすごく面白かったとしても、本当に面白いのかは自信がないから、とりあえず、「フツーに」を使うことで言葉を濁しています。」(F,'94)
- (35) 「この表現は直接的に「好き」や「嫌い」ということを伝えず、ぼかしを入れる効果があるように思う。たとえば、「この問題、フツーに難しいね。」という例の場合、難しいという気持ちがあるが、何がどのように難しいのかが自分でもよく解らないので、そのような曖昧さを伝えるのに使っているのだと思う。」(M,'93)
- (36) 「可もなく不可もないという意味を持ちながら、相手に気を使う働きがあると思います。「フツーに」という緩衝材を用いることで、言葉からムツとしたり、イラッとするなどのネガティブな印象を与えてしまう可能性をより減らすことができると思います。」(F,'93)

(33)では、友達から「この腕時計、可愛くない？」と聞かれて、それが特に可愛いわけではない場合、「フツーに可愛い」と答えることによって、相手を傷つけないようにしている。つまり、相手がその時計を可愛いと思う考えを直接否定しないようにしているのである。(34)では、「映画おもしろかった？」と尋ねられたとき、その面白さについて自信がないために、「うん、フツーにおもしろかったよ。」と答えている。そのことによって、言葉を濁らせているのである。また、「フツーに」を使うことによって、表現が軟らかくもなる。(35)では、問題の難しさについて、自分でもうまく説明できないときに、「この問題、フツーに難しいね」という言い方によって、ぼかしを入れて、曖昧にしている。つまり、(36)「フツーに」は、表面的には「可もなく不可もない」という意味を持ちながら、それを「緩衝材」、つまり、クッションとして使用することにより、相手の気持ちに配慮することができるのである。このように「フツーに」は、相手から事態の程度についての評価を求められたときに、「ぼかし言葉」として使用されることがある。

以上のことから、「フツーに」は事態の程度表現として、単に中位の程度を表すだけではないことが分かった。「フツーに」には、事態の程度を強調する機能の他、具体的で直接的な表現を避けてコミュニケーションを円滑にしたり、人間関係を維持させるための「ぼかし言葉」としての

表現機能があることが明らかになった。

3.2.2.「フツー(だ)」の使用場面と表現機能

3.1.2.の分析から、「フツー(だ)」は一般に中位からマイナス方向のレベルを表すことが明らかになった。また、“程度2”[97人(57.0%)]が最大グループを形成していることが分かった。実際にアンケート調査によって集まった「フツーに」の使用例の数は“程度3”が最多であったが、その次に“程度2”とするものが多かった。ここでは、特徴的だと思われる“程度2”の使用例を中心に、「フツー(だ)」が使用される場面について考察する。そして、その他の程度を表す使用例も含めて「フツー(だ)」の表現機能を分析する。

述語的用法「フツー(だ)」の使用例として、たとえば、次の(37)～(48)がある。

- (37) (友人に勧められた映画を見た後で)「映画、面白かった？」—「まあ、フツーだった。」(M,'92)
- (38) (友人から女優が好きかどうか聞かれて)「新垣結衣って、好き？」—「フツー。」(M,'94)
- (39) (友人に向かって)「今、すれ違った人かっこよくない？」—「別にフツーじゃない？」(F,'93)
- (40) (アイドルについて友人と話しているとき、自分がそのアイドルについて言う場合)「スタイルは良いけど、顔はフツーじゃない？」(F,'93)
- (41) (旅行先で友人と昼食について話をしている際)「もうそろそろお腹空いてこない？」—「え、フツーかな。そっちは？」(F,'92)
- (42) (テスト後に友人とテストの難しさについて話して)「テスト難しかったね」—「そう？フツーだったよ。」(F,'92)
- (43) 「(友人と他の友人の彼女について話すとき)「〇〇の彼女見たでしょう！どうだった？」—「んー、フツーだったよ。」(F,'92)
- (44) (友人と学食に行ったとき、学食の混み具合について話して)「今日、いつもより人多くない？」—「そうかな？フツーじゃない？」(F,'92)
- (45) (ちょっと話題のレストランに行って出て来た料理を食べたとき)「おいしい？」—「んー、思ったよりフツーだな。」(F,'92)
- (46) (友人とご飯を食べに行く話しをしていて)「ねえ、牛丼は？好き？」—「いやあ……、フツーかな。」(F,'92)
- (47) (美味しいと評判のカフェへ行ったとき、注文した料理が運ばれてきて)「わー、美味しそう！……(食べてみて)フツーだわ。」(F,'92)
- (48) (友達が好きなビジュアル系バンドの写真を見せながら)「ねえ、この人カッコ良くない？」—「うーん、フツーかな。」(F,'92)

これらの使用例から、述語的用法「フツー(だ)」は、相手から事態の程度について評価を求められるような場面で、事前の期待または自分の評価基準よりも評価が低かった場合にマイナスの意味を込めて使用されていることが分かる。たとえば、(37)では、友人から勧められた映画を見て、あまり面白くなかったが、それを悪く言うのは相手に悪いので、「フツーだった」と表現し

ている。(38)では、友人から女優の新垣結衣が好きかと聞かれ、「どちらかというと好きではない」ことを「フツー」と答えている。(39)では、歩いていて、すれ違った人が格好良かったかと問われたが、特に格好いいと思わなかったので「フツーじゃない?」と言い返している。また、(40)のように事態の程度について、自分の評価の同意を相手に求めたり、問い合わせたりするような場面でも使用される。その他の使用例(41)~(48)においても同様である。

次に、述語的用法「フツー(だ)」の表現機能について考察する。それは、「フツーに」の場合と同様に多様であると考えられる。「フツー(だ)」は、一般に中位からマイナス方向のレベルを表す。すなわち、「フツー(だ)」は、通常、中位(“程度3”)から<マイナス[ー]のレベル>(“程度1”と“程度2”)の事態を表す。

「フツー(だ)」が中位(“程度3”)の事態を表す場合のコメントとして、たとえば、次の(49)~(52)がある。

- (49)「たとえば、食事中に料理の味について「これ、美味しいよね!?”—「えっ、フツーだよ。」のように使用される場合、それは美味しくも、不味くもなく、いわゆる普通の味という意味である。」(M,'94)
- (50)「試験問題について「あの問題難しくなかった?”—「フツーだよ。」のように使われる場合は、その問題が易しくも難しくも感じなかったとき、つまり、平均的だと感じていることを表す。」(M,'94)
- (51)「風呂上がり、親からお湯の温度について「熱くなかった?」と聞かれて、「別にフツーだったけど。」と答える場合、それは熱いわけでも、冷たいわけでもない中途半端な温度という意味である。」(M,'94)
- (52)「友人と雑誌を見ていて、モデルの人の脚の細さに対して「このモデル、脚細くない?」と聞かれて、「え、フツーじゃない?」と返すとき、それは太くも細くもない、他のモデルと同じくらいの細さということ。ただ、「フツー」という言葉には、それ程深い意味はなく、相手の問いかけに無視するのはダメだから、適当に何か返事をするときにも使える。」(F,'94)

これらの使用例では、(49)「料理の味」、(50)「試験問題の難易度」、(51)「お風呂のお湯の温度」、(52)「モデルの脚の細さ」の程度について、それが一般的または標準値であることが示されている。いずれの場合の「フツー(だ)」も、単にその事態が表す程度が中位(“程度3”)であることを表している。このように、「フツー(だ)」には事態の程度が可もなく、不可もないという中位であること表す表現機能があることが分かる。興味深いのは、(52)の後半のコメントである。そのコメントからは、「フツー(だ)」という言葉は相手からの問いかけに何らかの形で返答しなければならないようなとき、とても便利な表現であることが分かる。このような場合は、「フツー(だ)」における「普通」という意味は実質的に薄いと考えられる。

さらに、「フツー(だ)」には、「フツーに」と同様に「ぼかし言葉」としての表現機能がある。上記の(52)の後半のコメントは、そのことを暗示している。「フツー(だ)」にその機能が認められるのは、中位(“程度3”)の場合の他、特にそれが<マイナス[ー]のレベル>(“程度1”または“程度2”)を表す場合である。そのことに関係すると思われるコメントとして、たとえば、次の(53)~(57)がある。

- (53) 「友人と食堂で2人ともうどんを食べているときに、「このうどん、美味しくない？」と聞かれて、「うん、フツーかな。」と答える場合、「フツー」と答えることによって、そのうどんの味についての詳細なコメントを相手にしなければならない状況を取り払うことができる効果があると思います。」(M,'94)
- (54) 「アイドルについて友人と話しているとき、自分がそのアイドルについて「スタイルは良いけど、顔はフツーじゃない？」と言うときは、アイドルにしてはあまり可愛くないが、はっきり可愛くないとも言えない。友人がそのアイドルを好きかも知れない。また、自分がはっきり言うのをためらったり、ぼかす効果があると思う。」(F,'93)
- (55) 「友人の作ったプラモデルが複雑だったので、「これ、かなり苦労したんじゃない？」と尋ねて、「いや、フツーだったわ。」と答える場合、相手の問いに対して否定するのが申し訳なく感じて婉曲的に否定しているように思われる。苦労していない事を伝えるのに「簡単だった」と答えると直接的なので「フツーだった」と答えることでぼかしている。」(M,'93)
- (56) 「「今日のご飯まずい？」と母親からご飯の感想を聞かれて、「フツーだよ。」と答える場合、「ご飯まずい」と言うより「フツーだよ」と言うほうが相手を不快な気分させないと思います。」(F,'92)
- (57) 「「ねえねえ、あの人がっこよくない？」と友人が格好いい人を見て感想を聞いてきたのに対して、「そうかな、フツーじゃない？」と言うような場合に、期待した程良くないとき、あるいは悪くないのだけれど、良いとは言えない時に、はっきりと否定せずあやふやにする。これは、相手の意見を否定することが失礼だと思い、遠慮する日本人の心情の表れで、否定を柔らかくした表現だと思われる。」(F,'92)

(53)では、友人からうどんの味についてのコメントを求められたときに、細かく説明することを回避するために「フツー(だ)」が使用されている。(54)では、そのアイドルが好きかも知れない友人に対する配慮から、「フツー(だ)」を使うことによって、アイドルについての自分の否定的な評価を明確にしないで済ませている。(55)では、相手の問いを否定するのが申し訳ないという気持ちから、直接的な返事を回避してぼかすために「フツー(だ)」が使われている。(56)では、母親が作った食事の味について返事をする際、相手に不快な思いをさせないために「フツー(だ)」が使われている。(57)では、人物についての相手の意見を否定すると失礼になるという考えから、「フツー(だ)」を使用して否定を柔らかくしている。これらの使用例から分かるように、述語的用法「フツー(だ)」においても、相手から事態の程度についての評価を求められたときなどに、相手の気持ちを配慮するため、または、返事をするものの面倒くさを回避するため、「ぼかし言葉」として「フツー(だ)」が使用されていることが分かる。

以上のことから、「フツー(だ)」においても事態の程度表現として、単に中位の程度を表すだけではないことが分かった。実際には事態の程度が低いものにも関わらず、それを「フツー(だ)」と表現することがある。それは事態の評価が低い場合に返事を誤魔化したり、相手の意見を暗示的に否定するような場合である。そこには、副詞的用法「フツーに」と同様に「ぼかし言葉」の表現機能を認めることができる。

4. 結論

以上、本稿では若者たちが使用する「普通」の副詞的用法「フツーに」と述語的用法「フツー(だ)」について、次の2つの問題を考察した。

- (イ) 「フツーに」と「フツー(だ)」が表す事態の程度レベル
- (ロ) 「フツーに」と「フツー(だ)」の使用場面と表現機能

問題(イ)については、次のような結論となった。副詞的用法「フツーに」と述語的用法「フツー(だ)」は、ともに事態の程度を表す。しかし、「フツーに」は一般に中位からプラス方向のレベルを表す。それとは対照的に、「フツー(だ)」は一般に中位からマイナス方向のレベルを表すことが明らかになった。このことを踏まえると、先に述べたNHK総合TV【みんなでニホンGO!】(2010年4月15日放送)における指摘は、確かに興味深いものではあるが、説得力を欠くように思われる。社会的価値観の変化によって、「普通」の価値が上昇したのであれば、「フツーに」だけではなく、「フツー(だ)」もプラス方向の程度表現に使用されていなければならない。しかし、一般的な傾向としては、そのことを確認することができなかった。先にも指摘したが、井本(2011)では、「フツーに」が高い程度を表すのは標準値よりも低い程度が前提として導入される文脈的条件、および、副詞的修飾関係という構文的性質によって複合的にもたらされる現象であることが論証されている。今後、なぜ「フツー(だ)」は一般に中位からマイナス方向のレベルを表すのかが明らかにされる必要がある。

問題(ロ)については、限定的ではあるが、次のような結論となった。使用場面は、両者ともに事態の程度について相手に尋ねたり、同意を求めるような場面、または、相手から事態の程度について評価を求められたときに、その応答の中で使用される。ただし、副詞的用法「フツーに」は、一般に中位からプラス方向のレベルを表す。そのため、事態の程度を一般的な中位として表現する他、事態への評価が高い場合、また強調表現としても使われる。他方、述語的用法「フツー(だ)」は、一般に中位からマイナス方向のレベルを表す。そのため、事態の程度を一般的な中位として表現する他、事態の評価が低い場合に返事を誤魔化したり、相手の意見を暗示的に否定する場面においても使用される。「フツーに」と「フツー(だ)」は事態の程度の中位、および、プラス方向またはマイナス方向の程度を表すだけではない。両者には、ともに「ぼかし言葉」としての働きがあることが明らかになった。そこには相手の気持ちに配慮して、具体的に直接的な表現を避けてコミュニケーションを円滑にしたり、摩擦を避けて人間関係を維持するための緩衝機能が認められる^{*9)}。

以上の結論から、副詞的用法「フツーに」および述語的用法「フツー(だ)」が表す事態の程度レベルには幅があり、抽象的で曖昧であることが分かる。つまり、聞き手にとっては、「フツーに」または「フツー(だ)」と言われても、その事態の程度が実際にどれくらい「フツー」なのかは判然としない。そのため、「フツー」の意味解釈は、会話の具体的な場面と状況および聞き手の評価基準などに高度に依存することになる。しかし、まさにそうであるが故に、「フツーに」と「フツー(だ)」は会話場面における対人関係の軋轢を調節する緩衝材(クッション)として働く。これらは、一定の距離を保った人間関係の維持を重んじる若者たちにとって、とても便利な表現である。両者は、単に事態の程度を表す表現であることを超えて、「ぼかし言葉」としても広く使用されていると考えられる。

最後に、今後の研究についての期待を述べたい。たとえば、「フツー(だ)」の使用例として、次の(58)がある。

- (58) (いきなり転けたとき、友人から心配されて)「えっ、大丈夫？はでに転けたけど。」—「いや！全然！フツーだし。痛くねーし。」(M,'94)

この(58)における事態の程度は、先に示した「フツー(だ)」が表す程度の一般的な傾向とは異なり、“程度5”である。話者は突然転んで、体のどこかを激しくぶつけた。そのため、体の当該箇所がとても痛いのであるが、「全然！フツーだし。痛くねーし。」と言っていることになる。この(58)についての回答者のコメントは、「正直言って、とても痛い」というものであった。つまり、この話者は友人の目の前で転んだことの恥ずかしさと強がりから、激痛を「フツーだ」と言って誤魔化しているのである。しかも、聞き手である友人には、そのことが分かっている。また、この場面では大きな笑いも起きていることが想像に難くない。この使用例(58)から明らかなように、実際の事態の程度と言語表現の関係は多様である。このような問題はとても興味深い。今後、程度表現全般についての語用論的機能に関する研究が切望される。

※本稿は、村瀬仁美が岐阜大学地域科学部に提出した平成25年度・卒業論文「若者たちの使う「フツー」とは」(2014)をもとに、アンケート調査を拡大させ、また、新たな知見を加えて、さらに論考を深めたものである。

註

*1) 副詞の用法は多様であるが、一般的に①陳述副詞<話者のモダリティを表す>、②情態(状態)副詞<動詞の表す出来事の様態を表す>、③程度副詞<事態の程度を表す>の3つに分類される。しかし、実際の使用例においては、次の例(1)~(4)のように、その区分は必ずしも明確ではない。

- (1) (帰宅が遅くなったとき母親から「何してたの?」と聞かれて)「フツーに遊んどったよ。」
②[情態副詞]または①[陳述副詞]
- (2) (家の近所から聞こえてくる楽器を演奏する音について弟に)「フツーにうるさいよね。」
③[程度副詞]または①[陳述副詞]
- (3) (サッカーのプレーを見ていて)「今のフツーに上手い！」
③[程度副詞]または①[陳述副詞]
- (4) (友人に女優が好きかどうか聞かれて)「新垣結衣、好き？」—「フツーに好き。」
③[程度副詞]または①[陳述副詞]

*2) NHK総合TV【みんなでニホンGO!】「フツーにかわいいね」って褒め言葉?」(2010年4月15日放送)の内容については、井本(2011:60-61)において詳細に報告されている。また、NHK「みんなでニホンGO!」制作班(2010:120-133)にも、その概要がある。

*3) 井本(2011)は、決してNHK総合TV【みんなでニホンGO!】(2010年4月15日放送)の内容を強く否定するものではない。語彙の意味が社会状況や社会的価値観の影響を受けて変化するのは言語の本質的特徴である。バブル経済崩壊後、日本社会の格差拡大と沈滞化の中で、「普通であること」の社会的価値観は当然変化してきていると考えられる。しかし、同氏は、現時点において、少なくとも文法的側面から見た場合、その番組内容には妥当性がないと主張している。

*4) 程度表現には、社会一般における常識的な「標準モデル」(たとえば、^方人^が認^める「普通^の可愛^さ」)によるもの、そして、話者によって異なる「個人モデル」(^個人^が考^える「普通^の可愛^さ」)によるものの2種類があると考えられる。しかし、これらを実質的に規定することも、また区分することも困難である。また、実際の談話における「フツーに」と「フツー(だ)」が表す程度の意味解釈は、個別の事態に対する個人の感覚や価値観、会話の場面と状況、さらに、話者のパラ言語的要素によっても変わりうるものである。本研究では、そのような問題は特に考慮せず、アンケート調査によって得られたデータのみを分析の対象とした。

*5) この質問(7)の選択肢1)~6)は、『平成22年度 国語に関する世論調査』(文化庁文化庁国語課2011)における「形容詞の語幹を使った言い方(「すごっ」等)について」の質問項目を参考にした。

*6) 「ぼかし言葉」は、物事を断定しない曖昧な言い方をする一連の表現である。それは「断定を避け言葉尻を濁したり、自分の意志を譲歩形の言葉で述べたりすることによって、自分の意見が相手にストレートにぶつかることを避ける」(中山1989:14)ための表現である。「ぼかし言葉」には、「発話(言語行為)の設定する対人関係を緩衝する」(辻1999)という語用論的機能、すなわち、発話することによって生じる対人関係の軋轢を調節する緩衝機能がある。『平成16年度 国語に関する世論調査』(文化庁文化庁国語課2005)によれば、近年、若年層では「ぼかし言葉」の使用は増加傾向にある。そこには現代の若者たち特有の心理が見て取れる。佐竹(1995)(1997)によれば、若者たちは自分の発言の正当性や妥当性に対する不安、聞き手の考えと異なることへの恐れ、また、そのことによって仲間から浮いてしまうことへの恐れを持っているという。さらには、聞き手からそれらのことを指摘されることも恐いのだという。つまり、若者たちの「ぼかし言葉」の使用は、そうした不安や恐れに対処するための戦略と考えられる。

参考文献

- 安藤千鶴子(2004)「副詞」、林巨樹／池上秋彦／安藤千鶴子〔編〕『日本語文法がわかる事典』東京堂出版
- 井本 亮(2011)「「普通にかわいい」考」、福島大学経済学会『商学論集79(4)』
- NHK「みんなでニホンGO!」制作班(2010)『みんなでニホンGO! オフィシャルブック 正しい日本語は本当に“正しい”の?』祥伝社
- 梶原 しげる(2003)「普通に」、『口のきき方』新潮社
- 北原 保雄(1995)「副詞の分類」、『日本語百科事典』大修館書店
- 佐竹 秀雄(1995)「若者ことばとレトリック」、『日本語学』14(11)明治書院
- 佐竹 秀雄(1997)「若者ことばと学校文法」、『日本語学』16(4)明治書院
- 佐竹 秀雄(2003)「フツーにおいしい」、[もの知り百科]《ことばのこぼこ》(読売・大阪夕刊2003年2月18日)
- 辻 大介(1999)「若者語と対人関係—大学生調査の結果から」、『東京大学社会情報研究所紀要』57号 <http://www.d-tsujii.com/paper/p08/index.htm>
- 中山 治(1989)『「ぼかし」の心理—人見知り親和型文化と日本人—』創元社
- 野田 尚史(2003)「副詞」、小池生夫〔編〕『応用言語学事典』研究社
- 文化庁文化庁国語課(2005)『平成16年度 国語に関する世論調査』国立印刷局
- 文化庁文化庁国語課(2011)『平成22年度 国語に関する世論調査』ぎょうせい
- 牧 太郎(2011)「牧太郎の大きな声では言えないが…:普通においしい?」
<http://mainichi.jp/select/opinion/maki/news/20110125dde012070062000c.html>
- 村瀬 仁美(2014)「若者たちの使う「フツー」とは」、平成25年度岐阜大学地域科学部卒業論文(洞澤研究室)
- 矢澤 真人(2005)「普通においしい」、北原保雄〔編〕『続弾! 問題な日本語』大修館書店
- 山口 仲美(2008)「フツーにうまい」、『新・にほんご紀行』日経BP出版センター

その他

- 北原 保雄〔編〕(2010)『明鏡国語辞典(第二版)』大修館書店
- NHK総合TV(2010)【みんなでニホンGO!】「「フツーにかわいいね」って褒め言葉?」
(2010年4月15日放送)